

「天地初發之時」の訓義

倉 野 憲 司

古事記上卷冒頭の「天地初發之時」の訓義については、嘗て私見を公にしたのであるが、これに再検討を加へて前説の不備不足を補ひたいと思ふ。識者の叱正を賜はらば望外の喜びである。

まづ「天地」について見ると、宣長は次のやうに述べてゐる。

天地は、阿米都知^{アメツチ}の漢字にして、天は阿米なり。かくて阿米てふ名義は、未思得ず。(中略)さて天は虚空の上に在て、天神たちの坐ます御国なり。(分註略)地は都知なり。(中略)さて都知とは、もと泥土の堅まりて、国土と成れるより云る名なる故に、小くも大きにも言ひ。小くはたゞ一撮の土を云、又広く海に對へて陸地をも云を、天に對へて地と云ときは、なほ大きにして、海をも包たり。

ところで万葉集を見ると、「阿米都知」又は「安米都知」の如き仮字書きの例が散見してゐるし、また「阿米」へ行かば、汝がまにまに、都智^{トチ}ならば、大君います^(三)のやうに、アメとツチとを相對せしめて使つてゐる例もあるから、天地をアメツチといふ國語に宛てた漢字だとする宣長の説は妥当と言はねばならない。しかし宣長がアメツチの訓を決するには、一往アメクニの訓を検討して

の上のことであつた。宣長曰はく、古書を見ると、アメに對しては必ずクニとのみ云つてツチとは云はない。例へば天神地祇(アマツカミクニツカミ)、天社国社、天某神国某神、天邇岐志国邇岐志、扇^レ天扇^レ国、アメにこそ聞こえずあらめ、クニには聞こえてなのやうに、皆クニを以つてアメに對せしめてゐる。そこでアメクニと言ふのが古言である筈であるから、古書に天地とあるのは皆さう訓むべきであると考へてゐたが、後に師眞淵の久爾都知考を見て、やはりアメツチの方が古言だといふことがわかつた。つまり宣長は師説によつてアメクニの考へを捨ててアメツチの訓を取つたのであるが、それはこの場合には妥当と言へるけれども、相對するアメーツチ、アメークニは何れも古言であつたのであつて、ツチとクニとが意義を異にしてゐるやうに、同じアメといふ語でも、ツチに對するアメとクニに對するアメとは、その意義内容を異にしてゐるのである。即ちツチといふのは宣長の説いてゐるやうに自然界の土(地)であり、クニといふのは人間生活を前提としたものである。従つてツチに對するアメは自然界の天であるが、クニに對するアメは人間生活の投影した高天の原とい

ふ世界である。宣長はアメーツチ、アメークニの間にかうした区別のあることを知らなかつたのであつて、それはツチを自然界の土（地）と説きながら、アメについては「虚空の上に在て、天神たちの坐ます御国なり」と述べてゐることによつて証せられる。つまり概念が混乱してゐるのである。宣長の説くアメ（天）は、高天の原といふ人間生活の投影した世界であつて、彼れめ説く自然界の土（地）と相對するものではない。もしアメ（天）を宣長のいふやうな意味にとるならば、地は当然クニと訓まねばならない筈である。しかし天地をアメツチと訓む以上は、天も地も共に自然界の天と地の意味に解すべきであり、こゝはアメツチと訓むのが正しいと思はれる。（因みに、宣長が「天は虚空の上に在て」と云つてゐることを不可解とする向きがあるかも知れないが、古代人は虚空の一段上に天はある、言ひ換へると、虚空は天と地の中間に位するものと信じてゐたやうである。それは、古事記上巻の末に見える海幸山幸の神話の中に、海神の宮を訪れた火遠理命を見て、海神が「此人者、天津日高之御子、虚空津日高矣」と言つたとあり、書紀の一書には「白其父神曰、……若從天降者、当有三天垢、從地來者、当有地垢、實是妙美之虚空彦者歟。」とあることなどによつて察知することが出来る。即ち天津日高の御子の虚空津日高と言へば、天を虚空より上に考へてゐることが知られ、天の垢もなく地の垢もない虚空彦と言へば、虚空を天及び地とは別に考へてゐることが知られるからである。しかしなぜアメとソラとを區別して考へたかは、今日明らかではない。）

然らば「初発之時」は、これをどう訓みどう解したらよからうか。順序としてまづ記伝の説を考へてみることにする。

初発之時は波自米能登伎と訓べし。万葉二（二十七丁）に、天地之初時之云々、十（三十二丁）に、乾坤之初時從云々、書紀孝德御卷に、与三天地之初云々などある、これら天地乃波自米と云る古言の抛なり。此に発字を運ねて書るも、たゞ初の意なり。（字書に発は起也と注せり。）事の初を起りとも云、又俗に初発と云も、古より波自米と云に、此二字を用ひなれたるより出たるなるべし。「初発をハジメテヒラクル」と訓るはひがことなり。其はいはゆる開闢の意に思ひ混へつる物ぞ。抑天地のひらくと云は、漢籍言にして、此間の古言に非ず。上代には、戸などをこそひらくとはいへ、其余は花などもさくとのみ云て、上代にはひらくとは云ざりき。されば万葉の歌などにも、天地のわかれし時とよめるはあれども、ひらけし時とよめるは、一つも無きをや。」さて如此天地之初発と云るは、たゞ先此世（仏書に世界と云て、俗人も常に然いふなり。）の初を、おほかに云る文にして、此処は必しも天と地との成れるを指て云るには非ず。天と地との成れる初は、次の文にあればなり。この説は、旧訓ヒラクルの排除に極力努めた宣長の苦悶の象徴とも見らるべきものであるが、なぜ彼れはヒラクルの訓をそのやうに目の敵にしたかと言へば、ヒラクルと訓めば開闢の意となり、天地開闢は即ち中国の思想と考へたからである。カラゴ、ロ（漢意）をあれほど排撃した宣長にしてみれば、「あるが中の最上の

史典」として尊び仰いだ古事記の開卷劈頭から漢意に基づく表現を認めることは、恐らく忍び得なかつたことと察せられる。そこで彼れは、眞向からアメツチノヒラクなどといふことは漢籍言であつて、わが国の古言ではないとして、旧訓の排撃に努めると共に、万葉や書紀の用例を引証してアメツチノハジメの新訓を振りかざしたのである。富士谷御杖が「畢竟ひらくるといふがからくさきをいかりてのわざなるまで也」と評したのは、蓋し肯綮に中る言であらう。要するに、「天地初発之時」に関する宣長の訓釈は非科学的であり、批判せらるべき点を多く含んであると言ふことが出来る。

第一に、宣長は「天地初発之時」をアメツチノハジメノトキと訓むべき証拠として、万葉の「天地之初時之」「乾坤之初時從」や書紀の「天地之初」などの用例を挙げてゐるが、それは実は証拠でも何でもなく、「天地初発之時」の訓を決めることには無関係のものであるといふことに注意しなければならない。万葉や書紀の用例は、古くアメツチノハジメといふ言ひ方があつたといふ証左にはなり得るけれども、だから「天地初発」はアメツチノハジメと訓むべきだといふことにはならない。初発をハジメと訓んだ例を挙げてこそ始めて証拠と言へるのである。こゝに宣長は一つの大きな過誤を犯してゐる。そこで彼れは自説の弱点を補はんとして、「此に発字を連ねて書るもたゞ初の意なり」と言ひ、「又俗に初発と云も、古より波自米と云に、此二字を用ひなれたるより出たるなるべし。」と言はざるを得なかつたのである。しかしこ

れも亦実証を欠くドグマに過ぎない。

こゝで一つの疑問に逢着する。それは「字書に発は起也と注せり」とわざ／＼分註まで施した彼れが、別しては上巻本文の「万物之妖悉発」「万妖悉発」の発の字をオコリキと訓んだ彼れが、なぜ「天地初発之時」をアメツチハジメテオコルトキと訓まなかつたかといふことである。もとより彼れが一往この訓を考へたであらうといふことは推測に難くないが、恐らくはこの訓みが言葉としてしつくりしないところから捨てたのではあるまいかと思はれる。現に御杖も「万妖悉発とかゝれたる発の字と同じくこゝも於古流といふ心に初発とはかゝれたるなるべし（中略）しかれども於古流とはよむべくもおぼえず」と言つて居り、山田孝雄博士も発にオコルの意のあることを認められた上で、

さて初発の熟字の意を考へるに「初」に重きをおく場合と「発」に重きをおく場合とがありうと思ふ。さうしてこゝはどうも、下の発に重心がある様である。「天地のおこり」といふ所に思想的の重心があると思はれる。（中略）私は「オコリ」といふ言葉を使つて讀んだ方が適切であると思ふが、古語に証拠がないから本居先生の言はれた様にまあ「ハジメ」とよむのである。と述べて居られる所からも、大凡の事情は推測されるであらう。

次は「万葉の歌などにも、天地のわかれし時とよめるはあれども、ひらけし時とよめるは、一つも無きをや。」と言つてゐる宣長が、なぜワカルの訓をとらなかつたかといふことである。宣長の言ふやうに、万葉にはアメツチノヒラクシトキとよんだ歌はないけれども、ワカレシトキとよんだ歌には次のやうなものがある。

天地之分時徒 (卷三、三一七)

天地之別時由 (卷八、一五二〇)

天地等別之時徒 (卷十、二〇〇五)

天地跡別之時徒 (卷十、二〇九二)

のみならず、古事記の序すら「乾坤初分」の語を用ゐて居り、書紀の一書のうち三つまで「天地初判」の文字を用ゐてゐる。これらは当然宣長の眼に触れたものであるが、それにも拘らず、なぜ彼れは初発をハジメテワカルと訓まなかつたであらうか。御杖は後にこそヒラクの訓をとつて宣長のハジメの訓を批判したが、初めのうちはヒラクの訓を心ゆかずとし、宣長説を肯定すると共に、書紀の一書に天地初判とあるのを根拠として、「波士米氏和可礼志止伎とぞよむべき」と言つてワカルの訓を一往は取り上げてゐる。然るに宣長がこれを取り上げなかつたのは、一つには発をワカルとは訓み難いからであらうが、又一つにはワカルもヒラクも結局は同じことで、彼れの忌み嫌ふ開闢の意になるからだと思はれる。彼れが「開闢之初、また天地初判などあるは、此記の首に、天地初発之時とあると同じくて、先づたゞ大らかに、此世の初と云出たるものなり。」と苦しい説明をしてゐるのを見れば、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。すぐれた文献学者と考へられる宣長にも、かうしたソフィスティ的な一面が暗い影を投じてゐるのである。

しかしながら、ひとたび古事記伝が世に出るや、学者の多くは右の宣長説に追隨し、これに批判を加へたり、異見を立てたりした者は極めて少ない。例へば、高木敏雄が「日本神話の天地開闢

説は、一種の啓發説なり。或は一種の進化論にして、剖判論には非ず。」とし、古事記が「開闢の初め」とか「天地剖判の初め」とか記さずに、「天地初発之時」の六字を以つてその巻を開いてゐるのは、即ち一種の啓發進化であつて剖判ではないと説いてゐるが如きは、宣長説の追隨以外の何物でもないであらう。また三矢重松博士も、

古事記伝の説に「ヒラクルといふは、開闢などいふ支那思想にて、此にふさはず。万葉集には、天地ノハジメノ時といふこと多きが、こゝもそれにて、発もハジメの義なり」とあるは卓見なりといふべし。

と述べて記伝の説を礼賛してゐるが、さすがに事實は無視するところが出来なかつたと見えて、

但當時にも、天地開闢などの思想はありけむと見えて、万葉集には「天地ノウカレシ時」といふ語もあれば、「ヒラクル」といふも由なきにあらず。

と述べて「ヒラクル」の訓を肯定しつつも、「我はなほ記伝の説に従はむと欲す。(動詞に訓まば、ヒラケシと過去に言ふべし。)」と、宣長説を捨てかねてゐる。更にまた山田博士も、「日本の昔には天地開闢といふ思想はない。唯ひろく天地のはじめの時といふのみである。天地開闢とは支那思想である。」「開けたと云はぬ所に日本古典の偉大さがある。天地剖判と云ふも支那思想である。」と、宣長説を極力支持して居られるが、前に述べたやうに「初発」の意義については宣長説を批判して、「おこりはじめ」の意とし、「私は本居先生のよみ方に先づ賛成しておくが意味は

違ふわけである。^(二五)と述べられてゐるのである。

こゝでまた一つの疑問に逢着する。それは天地開闢や天地剖判の思想は、宣長や三矢・山田両博士の言のやうに、はたして中国特有の思想であらうかといふことである。しかしこの疑問の解決は暫らく後廻はしとして、宣長説に向けられた批判を顧ることにしよう。

宣長の説に対して批判の第一矢を放つた者は、恐らく富士谷御杖であらう。御杖曰はく、

伊勢国なる本居宣長は、この神ぶみをば教ぶみにあらずして、ひたぶるに実録と定めたりし人なりしが、実録と定めたる人ながら、天地の渾沌開闢などの事はさすがにあやしくやはおもはれけん、この天地初発之時をば、万葉集の歌によりて、阿米都知乃波士女之登伎とよませられたり。されど歌はもじの数もさだまれる物なれば、波士女之登伎ともよめるなれば、歌をもてふみはおしがたき事なり。すでに開闢といふ字、神代卷本文にも一書にもみゆるをもちいはゞ、^(二六)此初発之時もかならず波士女氏比良祁志登伎とよむべきことなり。

と。御杖は既に述べたやうに、「畢竟ひらくるといふがからくさきをいかりてのわざなるまで也」と、宣長の排外的態度を看破してゐるが、こゝではアメツチノハジメノトキの訓と眞正面から取り組んで、二つの理由を挙げるによつて宣長説を不可とし、ハジメテヒラケシトキの訓を主張してゐる。その理由といふのは、
(一)、歌と文とは区別があつて、歌の詞を以つて文は推しがた
いこと。

(二)、神代卷に開闢といふ文字さへ見えてゐるから、これを参考すべきこと。

の二つである。(一)は一往尤もな考へであり、宣長自身も他の箇処では、「凡て歌と文とのけぢめあることをよく考べし。凡てこのたぐひ、今人は弁へなくみだりなり。」^(二七)と言つてゐる。しかしこれがはたして理由になるであらうか。宣長が万葉のアメツチノハジメノトキを取つたからこそ、かういふことが言へるかも知れないが、もしもアメツチノワカレシトキを取つてゐたとすれば、恐らくこの理由は成り立たないであらう。これに反して(二)は確かに有力な理由となり得るやうである。それはともかくとして、宣長は(一)も(二)も十分承知の上で、敢てハジメノトキの訓を選んだのであるから、始末が悪いのである。

御杖に次いで宣長説に異見を立てたのは多田孝泉である。孝泉は「いにしへ天と地と立分れたるそが最も初めのをりといふ詞の心なり。(中略)表文に乾坤初分參神作三造化之首」といへる記主の心を深く思はで、これを天地未生の初と見たる説どもは皆わろし。」とその著「略解古事記」に述べてゐるが、これは卓見といふべきである。併しながら「天地初発之時」の訓は、宣長の訓そのまゝを踏襲してゐて、この点不徹底と言はざるを得ないのである。

所で話をもとに戻して、問題の開闢思想について検討してみよう。天地剖判の思想は、宣長その他の人々が言ふやうに、必ずしも中国特有の思想であるとは思はれない。日本書紀の天神生誕の條の本文を見ると「是の時天地相去ること未だ遠からず。故天柱

を以て天上に挙げき」とあるが、天地相去ること未だ遠からずといふのは、天と地が徐々に相離れて行つたといふ考へを示すものであつて、その根柢には天地剖判の思想が横たはつてゐるのである。さうすると天地剖判の思想は、わが国にも存したといふことになる。又播磨風土記託賀部の條に載せてゐる伝説、即ち、

託加と名づくる所以は、昔大人ありて常に勾まり行きけり。南の海より北の海に到り、東より巡り行きける時、此の土に到來りて云ひけらく、他し土は卑ければ、常に勾まり伏して行けり。此の土は高ければ、申びて行けり。高きかもと云ひき。故、託賀の郡と曰ふ。

といふ巨人に托した地名伝説は、一地方に局限された素朴低級な天地剖判の伝説であつて、この事は次に掲ぐる琉球の古伝を見れば、自ら了解されるところであらう。

大昔天地が近く接して居た時代に、人は悉く蛙の如く這つてゐる。アマンチュウ（大始祖神）は之を不便と考へて、或日堅い岩の上に蹈張り、両手を以て天を高々と押上げた。それから空は遠く人は立つて歩み、その岩の上には大なる足跡を留めることになつた。

更にまたニュージールランドのマオリ人の間には、次のやうな神話が伝へられてゐる。

昔々天の父と地の母とは緊く抱擁して少も光明を漏らさなかつた。その間に生れた七柱の子は甚だ迷惑がり、森の神タネといふ一子が逆立ちして頭を地につけ、足を以て天を押上げた。それ以来天は常に高所に止まり、妻なる大地を恋しがつて、その

泣く涙が雨となり露となつて落ちるのである。^(一九)

かうなると、天地剖判の思想が必ずしも中国特有のものでないことが知られるであらう。それはわが国にも存し、また南方民族の間にも存する思想であつて、これを中国の思想と断じた宣長等は、こゝでも一つの大きな過誤を犯してゐると言はねばならない。が、仮りに一步を譲るとして、よしんば剖判思想が中国のものであるにせよ、日本人がその思想に影響せられて、天地の開闢を信ずるに至つたとしても、それは何とも致し方ないことであつて、われ／＼はあつさりその事実を認めざるを得ないのである。万葉に「天地のわかれし時」或いは「天地とわかれし時」と歌はれてゐるのは、少なくとも万葉人が天地剖判を信じてゐた事実を証するものであり、書紀に、

開闢之初（神代上、本文）

天地初判（同、第一、第四、第六の一書）

天地剖判之代（欽明紀、十六年）

天地開闢（皇極紀、四年）

とあるのも、よしや中国思想の影響はあるにしても、單なる虚飾とは思はれない。況んや古事記の撰者太安万侶がその序に「乾坤初分」とか「天地開闢」とか記してゐるのは、安万侶自身、天地の剖判を信じてゐた証左であつて、

乾坤初分、參神作三造化之首。

は、まさに古事記本文の、

天地初發之時、於三高原一成神名、天之御中主神、次高御產巢日神、次神產巢日神。此三柱神者、並独神成坐而隱身也。

と符節を合するものであり、

大抵所記記者、自天地開闢一始、以訖于小治田御世^(一)。

も亦、天地初発より推古天皇の御世に至る古事記の内容と一致するものである。この意味に於いて多田孝泉が、「記主の心を深く思はで、これを天地未生の初と見たる説どもは皆わろし」と断じたのは、正鵠を得た言といふべきであらう。宣長は記主即ち安万侶の心を無視し、といふよりはむしろ強めて目をふさいで、ソフィスト的言辞を弄せざるを得なかつたのである。その心事はむしろ悲壯であり、文献学者宣長と国粹主義的思想家宣長の相尅が、天地初発之時の訓義をめぐつて、大きな渦を巻き起こしてゐると見られるのである。

ところで今一つ宣長の誤謬を正して置く必要がある。それは「此処は必しも天と地との成れるを指て云るには非ず。天と地との成れる初は次の文にあればなり。」といふ言についてである。いつた宣長のいふ「次の文」とは何かといふに、それは「次国稚如二浮脂二而」以下の文であることがわかる。なぜならば、宣長は「浮脂」の釈義の中で、「抑此段は、天地の成る初発^(二)を云るにて、先其初に、此物の一叢生出たるなり。」と述べてゐるからである。しかしこの考へも誤りである。天地初発を天地の剖判の意に解しないところから、必然的にかうした考へが導き出されたものと思はれるが、「次国稚」の「国」は即ち「地」であつて、冒頭の「高天原」なる「天」と対立したものに他ならない。さうして「国稚如二浮脂二而、久羅下那州多陀用弊流之時」とあるのは、天と地とがわかれたばかりで地がまだ不完全で固定しない状態の時を言つた

ものである。然らばなぜ單に天と言はずに高天原といひ、地と言はずに国といつてゐるかといふに、それは宗教的乃至政治的意義に於ける高天原と葦原中国との対立意識が強く作用したからに他ならないのである。^(三)

以上私は「天地初発之時」の訓義に関する宣長の説を徹底的に批判した。さうして宣長がどんな学問的過誤を犯してゐるかを一々指摘した。それと同時にこの過程を通して天地初発は乾坤初分・天地開闢・天地初判などと同義であることを略々明らかにしたと思ふ。それは疑ひもなく天地剖判の思想である。そこで残された問題は「天地初発之時」の六字をどう訓むかといふことだけである。

さて天地初分の分や天地初判の判は、もちろんワカルと訓むべき文字であり、また万葉には「天地のわかれし時」と歌はれてゐるから、「天地初発之時」をアメツチハジメテワカレシトキと訓むことにすれば、問題は甚だ簡単に片附くのであるが、発をワカルと訓むことは何と言つても無理である。そこでどうしても別な訓を求めねばならないことになる。字書を見ると、発には起くる、放つ、開く、行く、あばくを始め種々の意味のあることがわかるが、それならば古事記の本文自体に於いては、発の字をどんな意味に用ゐてゐるかを調べてみる必要がある。その用例は次の六つのみである。

万物之妖悉発。(上卷、須神涕泣の條)
万妖悉発。(上卷、天石屋戸の條)

自二日向一發、幸ニ行筑紫一（中卷、神武記）

自ニ其処ニ發、到ニ当芸野上一（中卷、景行記）

所ニ以發ニ是問一者（中卷、應神記、分註）

於ニ國中ニ烟不レ發（下卷、仁德記）

最初の二つは起くる、次の二つは出發する、次は出だす、最後は起つての意であつて、開くの用例は見出せない。このうち初發の訓の參考となるのは最初の二例であり、私はこれを根拠として前説に於いては「アメツチハジメテオコリシトキ」の試訓を提示して置いたのであるが、今考へてみると、この試訓は記中の用字法と一致する点に於いては無難であるけれども、上代にさういふ言ひ方があつたかどうか頗る覺束なく、語としてもしつくりしない感があるので、これをどこまでも主張する考へはない。

そこで残るはヒラクの訓が妥当か否かの問題であるが、宣長以前の旧訓は次に掲げるやうに殆どすべてヒラクである。

初發之時ヒラク（道祥本、春璣本）

初發之時ヒラク（前田家本）

初發之時ヒラク（猪熊本）

初發之時ヒラク（寛永版本）

初發之時ヒラク（度会延佳「鼈頭古事記」）

右によると、初發をハジメテヒラケシ、ハジメテヒラクル、或いは單にヒラクルと訓んでゐて、必ずしも一樣ではないけれども、とにかく發をヒラクと動詞に訓んでゐることだけは一致してゐる。ところでこれらの旧訓が何に基づいてゐるかは明らかでないが、發を開の意味に使つた例は、中国でもかなり古いところにある。

る。即ち、尙書、武成篇を見ると、

散鹿台之財發鉅橋之粟

とあつて、その疏には、

散者言其分布發者言其開出互相見也

とある。ひるがへつて古事記の序を見ると、

乾坤初分、參神作ニ造化之首一

陰陽斯開、二靈為ニ群品之祖一

と對句になつてゐるが、對句はそれ全部で一つの意味をなすものであり、右の疏に「互相見也」とあるやうに互に相見て始めて完全な意味をなすものである。従つて「分」と「開」とは互に相見るべきものであり、安万侶は天地及び陰陽のワカレヒラケル意味で、この對句をなしてゐることが知られる。この事と發に開の意味のあることを考へ合はせると、「天地初發之時」を旧訓のやうにアメツチハジメテヒラケシトキ、或いはヒラクルトキと訓んでも、理論的には差し支へなさうである。しかし古今集の仮名序に「この歌、天地のひらけはじまりける時より出で来にけり」とあるのでもわかるやうに、天地のヒラクルといふ言ひ方は平安時代以後には存するにしても、奈良時代以前にそれがあつたといふ証拠は、今の所見当らないから、實際的には右のやうに訓むことに問題があらう。私の答案はこゝでハタと行き詰まつてしまつた。たゞ理論的な思考と旧訓を支へにして、「アメツチハジメテヒラケシトキ」と訓むのが一番よさうに思はれるのみである。

註（一）雜誌「國語解釈」第一卷第八号（昭和十一年九月）、後に拙著「古典と上代精神」（昭和十七年三月發行）に收録。

- (二) 岩波文庫「古事記伝(一)」、一六七—一六八頁。
- (三) 卷五、令反惑情歌一首(八〇〇)。
- (四) 岩波文庫「古事記伝(一)」、一六八頁。
- (五) 同上、一七〇—一七一頁には「高天原は、すなはち天なり。(分註略)かくてたゞ天と云と、高天原と云との差別は、如何にぞと云に、まづ天は、天神の坐ます御国なるが故に、山川本草のたぐひ、宮殿そのほか万の物も事も、全御孫命の所知看此御国土の如くにして、なほすぐれたる処にしあれば(分註略)大方のありさまも、神たちの御上の万の事も、此国土に有る事の如くになむあるを(分註略)高天原としも云は、其天にして有る事を語るときの称なり。」と、宣長自身説いてゐる。
- (六) 同上、一六九—一七〇頁。
- (七) 富士谷御杖集、第一卷、一三八頁。
- (八) 同上、三五六頁。
- (九) 古事記上巻講義、一、一八一—一九頁。
- (一〇) 富士谷御杖集、第一卷、三五五—三五六頁。参照。
- (一一) 岩波文庫「古事記伝(一)」、一八七—一八八頁。
- (一二) 比較神話学、一六六頁。

- (一三) 古事記に於ける特殊なる訓法の研究、一〇—一一頁。
 - (一四) 古事記上巻講義、一、二〇頁。
 - (一五) 同上、一九頁。
 - (一六) 富士谷御杖集、第一卷、六九—七〇頁。なほこれとは同様なことは、同書三一六—三一七頁にも述べてある。
 - (一七) 岩波文庫「古事記伝(一)」、二三七頁。
 - (一八) 柳田国男著「一目小僧その他」、四〇—四一頁。
 - (一九) 松岡静雄著「紀記論究、創世記」、五六—五七頁。
 - (二〇) 岩波文庫「古事記伝(一)」、一八六頁。
 - (二一) 詳細は拙著「日本神話」(日本文学大系第六卷)の中の「別天神五柱」の項を参照されたい。
 - (二二) 石井庄司氏はその著「古典考究、記紀篇」の中の『古事記の「天地初発之時」に就いて』に於いて、『倉野憲司氏が「ハジメテオコルトキ」と訓まれたのは注意すべき訓と思ふ。ただ自分は「初発」を熟字と見て「ハジメオクル」としてはどうかと思ふ。そして、「アメツチノ」の「ノ」を入れることとする。』と述べられてゐる。(一一八頁)
- 〔附記〕本稿は福岡女子大学学術研究費による研究の一部を発表したものである。
- (一九五〇・一二・一六)